

はしがき

「政党」という言葉にポジティブなイメージを持つ人間はあまりいないのではないだろうか。一八六二年にヨーロッパに留学した福沢諭吉が、当時のヨーロッパの人々が政治上の議論を堂々としていることに衝撃を受けたとして次のように回想しているのはよく知られている。

党派には保守党と自由党と徒党のやうなものがあつて、双方負けず劣らず鎬を削つて争ふて居ると云ふ。何の事だ、太平無事の天下に政治上の喧嘩をして居ると云ふ。サア分らない。コリヤ大変なことだ、何をして居るのか知らん。少しも考の付かう筈がない。彼の人と此の人とは敵だなんだと云ふて、同じテーブルで酒を飲んで飯を喰て居る。少しも分らない。ソレが略分るやうにならうと云ふまでには骨の折れた話で、其謂れ因縁が少しづつ分るやうになつて来て、入組んだ事柄になると五日も十日も掛つてヤツト胸に落ると云ふやうな訳けで、ソレが洋行の利益でした。（『福沢諭吉全集 第7巻』岩波書店、一九五九年、一〇八頁）

福沢の感じた違和感とは、「太平無事の天下」の中にあつて政治の「喧嘩」を繰り返して居る人々の姿にあつた。これは後年の回想であり、福沢の誇張もあるかもしれないが、人々が「徒党」を組んで、敵と飲食を共にして議論をしていることにカルチャー・ショックを受けたことは間違いないだろう。また、福沢が「徒党」というマイナスイメージを想起する言葉で政党を表現している点も注意したい。徒党を組んで政治的な企みを堂々と議論する姿は、幕藩体制下の秩序に慣れ親しんだ福沢にとっては、衝撃的だったはずである。福沢の衝撃から一六〇年ばかり経過した現在（二〇二五年）において、はたして政党は日本に慣れ親しんだ存在となつたのだろうか。今日の「政治不信」とも言える政治社会のあり方を考えると、福沢の戸惑いはなお示唆に富むものではないだろうか。

本書は、こういった戸惑いをもって迎えられた政党が、いかにして政治社会の中に浸透しようとしたのか、政治社会はどのようにそれを受け止めたのかを明らかにするものである。そのために本書は、政党をめぐる数々の要素にスポットを当てていく。たとえばそれは政治家であり、また政策であり、地域であり、あるいは組織であり、メディアであり、政党や政治家に対するイメージなどである。政党と一言に言っても、その捉え方は様々である。これらの要素について端的にその意味を述べるなら、政党に所属したのが政治家であるなら、政治家が政党の支持を広めようと用いたのが組織や政策であり、それに対する社会からの応答がメディアによる評論とそれによって生じるイメージ形成であった。本書は政党とそれを取り巻く政治社会の変容を捉えながら、戦前期の政党政治を捉え直す試みである。言うまでもなく戦前の政党政治の経験は、現在の政治社会のあり方を考える上でも知っておくべき教訓が多くあるはずである。

本書の問題意識の一つは、今なおマイナスイメージが付きまとう政党に多くの人々が集い、それが政治社会に大きな変化をもたらしたこと、そして政党もまた政治社会に影響を受けながら変化したという相互作用を明らかにしたいということである。歴史とは現在と過去との対話であるとの言葉はよく見聞きするが、本書は政党と政治社会がどう「対話」しながら、日本のデモクラシーの歴史を形作ったかを明らかにする試みであるとも言えよう。